

Dear地球民

第19号
1998年7月発行

編集発行 ゆがわら国際交流協会
〒259-0303 神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1
湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111

ご挨拶

ゆがわら国際交流協会会長 高橋 賢次

梅雨明けの候、ますますご健勝のこと
お喜び申し上げます。

湯河原国際交流協会も今年、設立10周年
を迎える事が出来ました。

これもひとえに皆様のご支援の賜と、
有り難く心からお礼申し上げます。
これを機に会員及び役員の決意も新たに
邁進いたします。

このたび伊藤会長の後を受け、会長を
務めさせて頂く事になりました。

副会長の頃より、皆様には格別のご厚
情にあずかり、誠にありがとうございます
でした。

今後は浅学非才のみではありますが、本協会に課せられた社会的役割を果たすべく、
努力してまいる覚悟でございます。

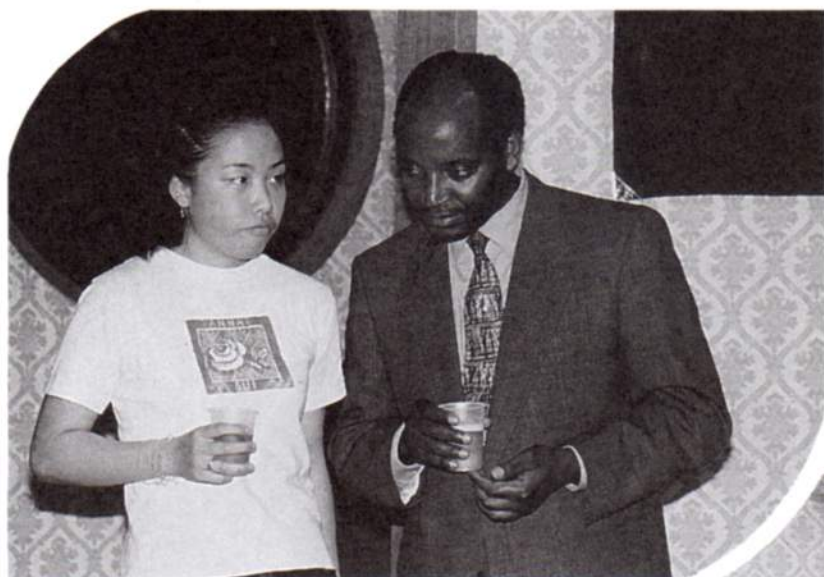
何卒、倍旧のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



協会設立十年を迎えて

民間ボランティアの国際交流団体として、ゆがわら国際交流協会が発足して早十年。この日を迎えられたのも、ひとえに協会員、ホストファミリーほか、皆様のご助力あってのことと、役員一同感謝申し上げます。これを祝って、協会の設立10周年記念式典並びに記念講演会が、5月29日夜、商工会館にて举行されました。当日は、町内外から多くの来賓をお迎えし、以前湯河原にホームステイした留学生も参加しての、国際色豊かな催しとなりました。式典では36の個人・団体へ感謝状が授与され、記念講演、懇親会まで、終始なごやかに進められました。

「やさき国際交流」に、毎年留学生を送っていただいている、JET日本語学校校長の金美齢先生を講師に迎えての講演会は大好評で、テレビでおなじみの金先生の、率直で真摯なお人柄にふれることができました。懇親会では、金先生がホストファミリーの一人ひとりに感謝の言葉を掛けられ、留学生の思い出話を交わされ、「真の教育者」であられる先生と、貴重な時間を過ごすことができました。



〈左〉

ケニア大使館のアベル・サジニ書記官と、当日のホストファミリー秋山里花さん。

翌日は湯河原を観光し、温泉を満喫されたそうです。



懇親会場には、スタッフ手作りのスパイシーなタイカレーの屋台も登場。右はドリンクコーナーでサービスする会員親睦委員会の面々

記念講演 「内なる国際化・外なる国際」



J E T 日本語学校校長 金 美齡先生

先程感謝状をいただきましたが、実はこちらから感謝状を差上げたくて参りました。私のJ E Tの日本語学校も満10年を迎えまして11年目になりました。

学校が始まりまして2年目にゆがわら国際交流協会からヤッサ祭りに参加しないかのお誘いの話がありました。私は学生がこの様なお祭りに参加することが一番勉強になるとの信念の持ち主でありますので、是非とも参加させて下さいと、毎年お願いしてまいりました。

学生にまず話すことは、ゆがわらのホーム・ステイをすることは絶対にお勧めだと伝えてまいりました。

大体アジア系の学生が多いのですが、希望者が多く残念ながら全員の申込は受け入れてもらえません。籤引きで人数をしぼり、こちらからの希望は女子学生が多いのですがなんとか男子学生も増やしてほしいとお願いし、毎年ご無理を申上げております。一週間の滞在で、男女を問わず、“日本のお母さん”という感謝の言葉がどれほど学生に強い印象を与えるか、教育の一環として、私たちにも考えさせられるものがあります。例えば韓国のゴン君は短期の学生でしたが、国に帰って兵役を済ませて、またゆがわらのお母さんの所へ行くんだと言って帰国しました。勿論その他の学生も同様に全員が感謝の念で一杯であります。やれ、お母さんからミカンを送ってもらったと喜び、まるで我が家のおふくろさんの様な喜びようです。

昨年秋頃こちらから十周年の記念の会のご招待を頂きました。喜んで参加させて下さいとご返事を差し上げました。

テーマは英語に訳せない日本語

本日の私のテーマは『内なる国際化、外なる国際』です。これは英語に翻訳出来ません。日本語独特の表現です。

非常にあいまいな言葉で、これが日本語の良さであり、欠点でもあるわけです。この意味を聞かれたので、これはマインドだと答えました。別の言い方として、建て前と本音、観念の感覚とでも表現できると思います。

日本ほど国際、あるいは国際化と言う言葉があふれている国はないと思います。大学で国際と言う名称をつけると学生が集まるといわれています。

一方日本人ほど真面目な国はありません。私は真剣に信じています。日本人の皆さんが国際化をしなければならないと信じていらっしゃる。これが日本人の良い点です。これを具体化して表現するときに、いささか誤りがあります。そこで私が『内なる国際化、外なる国際』とタイトルを付けた理由です。

今時の学生のスタイル

私は早稲田大学で二十年教鞭をとりました。かなり偏差値の高い大学であります。その講義の状態の一例として、三列の教室で、真ん中に着席しているのは一名の留学生だけです。両側に日本の学生が座ります。一瞬その学生を差別しているのだと思いました。しかし実情はそうではなくて、安心しました。学生の悪い習慣で、そのような着席をするのです。私の姿勢は真剣そのものです。絶対に私語はゆるしません。居眠りをしては宜しい、漫画本を読んでも宜しい、人の邪魔を許さないのです。こうした、当たり前のことが守られないのが残念ながら実情なのです。

留学生を差別はしません。ただ残念なことは緊張感が足りない事なのです。仲間どうしがむれて集まり、異質なものを出来るだけ避けようとする傾向が強く、自分自身が何らかのチャレンジしようと努力をしようとしないのが今の学生の姿なのです。

面倒なことを避ける、しかし国際化の問題を語らせると立派なことをしゃべる、書かせても適当な内容のものを書きます。これはどう解釈すれば宜しいのでしょうか。私はこれは観念と感覚の相違、建て前と本音の違いであると思います。

最初は外国人の取り扱い方が分からなかった

先程高橋さんのお話では、初めての頃はホーム・ステイの受け方をどうすれば良いのかまるで見当がつかなかったとの御話でした。長い鎖国の歴史の影響もあるでしょうし、外国の人との接触の経験も比較的になく、それはごく自然な事だと思います。その中で湯河原のお母さん方が長年にわたり、留学生の面倒をみてあげたことは本当に素晴らしい事だと思います。尊敬申し上げます。

先程、お母様と子供さんがこの舞台上で表彰状を受け取る姿を拝見して、これこそが子供さんへの本当の教育になるのだと痛感しました。

心の教育とは？

今日本の若い人達がすぐ、切れるとか、我慢が足りないとか、何を考えているのか分からないとか言われておりますが、今心の教育ということが叫ばれております。私はシンポジウムのパネリストとして意見を申上げる機会が多いのですが、人の話を聞いたからとか、一冊の本を読んだからと言う事では教育の本質は理解出来るものではないと言う事を申上げております。

心の教育とは生活の積み重ねであり、すべて生まれおちてから現在に至るまでの教育の体験の総和であり、これが毎日の繰り返しから人間としての刷り込みが決まっていくのだと思っております。

こうした教育、躾をすることによって、間違いなく偏見を持たない、国際人として育っていきます。



「国際化——日本は遅々としてではあるけれど、
良い方向に進んでいます。」
熱く語られる 金美齡先生

私の子供が小学校に入った時、友達から台湾人と言われ、意味が良く分からないながらも私に報告してきました。初めての経験でしたので大いに戸惑ったのでしょうか。このような質問をもし皆さんが受けたらどうなさいますか？

私は子供に誇りを持たせるために、これは希少価値というものなんだよ、と言聞かせました。勿論子供にはその意味が分かりません。

その例としてダイヤモンドの話をしました。ダイヤモンドは沢山の石の中にたった一粒で光輝いているから価値があるんだよと。だからお前は大勢の中でたった一人の台湾人だという誇りを持ちなさいと言聞かせました。やがてそうしたいじめが無くなり何時の間にか溶け合う仲間となりすべてが自然に解決しました。

教育とは、その子に誇りを持たせることが大変大事なことでないでしょうか。少数派とならず、なんらコンプレックスを持つこともなく、自然に育ち、心の平和を保ちながら、お陰様で今は立派に社会人として生活をしております。

自分の心の姿をどう見るか

ある意味では人間の心と言うものは他人を写すものであったり、自分を仮に見せるものでもあったりします。

私は日本の皆さんが国際化と叫ばれていることは評価します。反面、拘れば拘るほど国際化から離れていくケースもあるような気がします。

先程早稲田大学の学生の例を取上げました。つまり彼等には差別の意識はありませんが、残念ながら真剣味が足りません。無関心とも言えます。

しかし、多くの日本人はどうしたら外国人をもてなすか真剣に考えてしまいます。それが反対に弊害になることも有るんです。ともあれ自然の対応が相手に対する近道であることを知るべきではないでしょうか。

日本は自信を持つに足る国

日本の皆さんは昔から外国から学ぼうと長年努力して参りました。しかし私に言わせると実は青い鳥なのです。身近にあるものなのです。

日本人は世界の中で一番安定して、一番暮らしやすい国であると言う事を知るべきではないでしょうか。日本人は自信を持って認めるべきなのです。

日本人は世界で最も向上心のある国民です。清潔であり、秩序を守る国なのです。例えば、本日小田急電車でまいりました。時刻表通りにぴったり到着しました。こんな交通機関を運営している国はあまり例をみません。

アメリカでジャーナリズムを勉強する

私は初めはアメリカでジャーナリズムを勉強しようと思いました。その機会に恵まれず、最初は日本で英語を勉強し、渡米のチャンスを待ちました。1976年アメリカの200年記念の頃に、渡米する機会に恵まれました。しかし、憧れのアメリカに着いて直ぐ、ここは私の住む所ではないと判断しました。何故ならばアメリカは車社会で、車なしではどこへも動けません。私はメカ音痴なのです。また車は凶器にもなり、武器にもなります。もし事故でも起せば大変な事になります。

それからもう一つの理由はアメリカのパンはまずいのです。悪口をいう人は極端な悪口を言います。結論として私はアメリカに住めないということで、日本に帰ってきました。

しかしアメリカは個人の可能性でチャレンジでき、その点魅力のある国です。



ホストファミリーのみなさん
金先生を囲んで

日本の国際化

日本は多少遅れてはいましたが、1959年つまり私が永住を決意してから非常に住みやすい、良い国になりました。外国人に向けてテンポは遅まきながら、はっきりと改善されました。私がいつも申し上げていることは、日本という国はいつも正しい方向に向かって来ました。

内なる国際化、外なる国際に向かって、日本人は非常に謙虚に、研究熱心で、少しでも良い方向に進むことに努力されています。

しかし、理論的であったり、観念的であったり、感覚的にどうなのか、建て前と本音をうまく使い分けながら、遅々として正しい方向に進んでおります。私はこの点大変尊敬しております。

こうした文化の違いの落差を少しでも埋めていく努力をされている方が沢山いらっしゃいます。私の世代では、就職をするにも、はっきりした差別がありました。私の主人も苦い経験を持っております。それも徐々に改善され、二十数年後の今二人の子供達は正式に一流の会社に外国籍のまま社員として採用されました。

このように時間を要しながらも改善されているのです。

湯河原の皆さんは十年以上も前から実際の行動を起こして来られたわけですが、このような善意にあふれた行動が他の町にも広がれば、日本の国際化は一層広がることでしょう。

先駆者でありますご当地の皆様のご厚意に心から尊敬申し上げ私の講演を終わらせて頂きます。ありがとうございました。

— 金 美齡 先生 プロフィール —

台湾、台北生まれ

1959年 早稲田大学第一文学部英文学科入学

1971年 同大学院文学研究科博士課程修了

1975～76年 イギリス・ケンブリッジ大学客員研究員

早大大学院在学時より、聖心女子学院、東京女子大、東京理科大、フェリス女学院大学の講師を歴任し、特に早稲田大学では、96年に至るまで、20年以上にわたり英語教育に携わる。

1988年よりJET日本語学校校長



記念講演の所感

協会設立10周年記念に際し、大変貴重なお話しをいただきました。

金先生は、コメンテーターとしてテレビでも活躍されておいでですが、JET日本語学校の学生を、毎年夏にお世話しているご縁で、今回記念講演をお願いしました。

「歯に衣着せぬ物の言い方」という表現がありますが、まさに見事な話をされる方で、協会に率直な賛辞をいただきました。メンバーとして、素直に受け止めてよろしいと思いました。それほどお互いの誠意が通じ合う一時であったと感じました。「内なる国際化・外なる国際」というテーマは、日本人全体の重いテーマとして受けとめるべきものかもしれませんが、私たちは”おふくろの味”を通して、肌で日本の心を感じてもらう方法がベストだったのだと再確認した思いでした。

[石井 宏樹]

オーストラリア発
国際親善の旅

ポートスチーブンス



1996年4月、役員3名がポートスチーブンス市を訪問し、心温まる歓迎を受けてから1年半が経ち、その時の約束でもあった小・中・高校生との文化交流が昨年12月、遂に湯河原町で現実のものとなりました。

重い荷物、大切な楽器、オーストラリアの暖かい風、優しい笑顔と共にジョン・バートレット市長、イネス・クライトン訪問団長以下総勢41名というたくさんの方々々が来湯し、12月15日～17日の2泊3日という短い滞在でしたが、中身の濃い親善交流が行われました。

第1日目は、夕刻の熱海駅での出迎えから始まり、一番楽しみでもあり、緊張もされるホストファミリーとの対面式と歓迎式が開かれました。同じユニフォームで颯爽と会場に現れ、少しずつ交流の輪が広がっていき、高橋会長代行の「湯河原町では、一人ひとりのホームステイを期待して、十分にお楽しみください」という言葉で始まり、イネス・クライトン訪問団長の一生懸命練習したという日本語での「新しい友達をたくさん作ることを楽しみにしています。」との挨拶がありました。

ホスト代表、岩本京子さんの「Hello, everyone. Welcome to YUGAWARA! お互い知らないことばかり、初めてというのは新鮮なこと。お互いを理解することは素敵なこと。日常生活を通して国際交流の輪を広げることは嬉しいことです。」そして、金井副会長の「帰りは皆さんの素晴らしい笑顔返してください。」という温かい言葉とともに一日が終わり、それぞれ家路に着きました。



始めはちょっと緊張した対面式でも、すぐにニッコリブルック・ウィルソンさんと鐘築さん

親善交流の集い



高橋会長代行より「地球民認定証」を受ける
ポートレット市長と、ホストファミリーの
山田さんご一家

2日目は市長、市議会議員、姉妹都市委員会のメンバーが湯河原町役場を表敬訪問されました。米岡町長の「四季それぞれ美しい自然と温暖な環境の中で、温厚で親しみやすい人々の住む湯河原町とポースチーブンス市が、お互いの広い分野での交流が深まることを心から願います。」という挨拶と、ポートレット市長の「太平洋の周りの人々との交流、桜の咲く湯河原町と桜の花に似たジャカランタの花咲くポースチーブンス市の人々との交流が平和を作っていく。これからこの交流がずっと続きますように。」という挨拶があり、和気あいあいとした雰囲気の中での質疑応答の後、ポースチーブンス市より国旗（星は南十字星を表しているとの説明あり）と市の紹介の本、ガラスのレリーフの贈呈がありました。返礼として湯河原町より、一人ひとりに町の花・椿を染めた壁掛けが贈られました。

心温まる表敬訪問の後、湯河原南ロータリークラブ主催の昼食会へと続き、先に出発していた学生たちと合流し湯河原、箱根の旅を楽しみました。♪ 頭を雲の上に出した富士山との対面、雪との出会い、ホストファミリーの心づくしのお弁当の後、芦ノ湖遊覧、大涌谷、コアラならぬ猿との出会い等々小さな旅を満喫しました。

疲れる様子もなく湯河原へ戻った後は、今回のメインセレモニーである「親善交流のつどい」が4時半より観光会館で開かれました。文化交流会では、お互いの中・高校生による交流が様々な形で始まりました。

ポートスチープンス市はネルソンベイ中・高生のプラスバンド演奏に続き、“オーストラリアの動物” “アボリジニとの共存を願う和解” そして“若者の祝典” という3つの創作ダンスが披露されました。コスチューム共々、テーマ性、物語性があり、目を奪われました。最後に“私はオーストラリア人” “故郷はやっぱりオーストラリア” という美しい歌でポートスチープンスの学生による出し物が終了しました。

湯河原町は湯中の吹奏楽部による“フェスティーボ” “マイウェイ” の2曲が披露され、一つひとつの音が美しく重なり、曲の意味と共に会場内が優しい雰囲気になりました。最後に全国レベルで高い評価を受けている湯河原高校演劇部による「戦争と平和」をテーマにした素晴らしいダンスパフォーマンスがあり、それぞれの出し物に観客全員が引き込まれ、楽しい時間となりました。

その後、スタッフの手品のように見事な準備と共に夕食会、懇親会が開かれ、湯河原町のみかんを始め盛りだくさんの日本食、あたたかいカレー、キウイワイン等々に舌鼓を打ち、心もお腹も満腹になり、この交流のつどいを確かな手応えとして感じる事ができた夜でした。

3日目、次の目的地である京都、広島に向けて出発するポートスチープンスの人々との別れの朝を迎えました。二泊三日の滞在中に心と心を通い合わせたホストファミリーの人々と、涙と共に次の再会を約束して車中の人となりました。

最後になりましたが、先人たちが作ってくれた今、この平和な時代に旅人をも大切にしていこうという2つの市、町の始まるべくして始まった交流を「訪れる人々を温かく迎え、世界にはばたく町を拓きましょう」という町民憲章の言葉を内に秘め、人と人との間でしか存在しない心=魂を大切にこの交流が続いていくことを願ってやみません。



ポートスチープンスの学生による
オーストラリアの香りたっぷりの
ダンスパフォーマンス

ホストファミリーの
みなさんに
インタビュー



9歳のソフィーちゃんも
がんばりました

☆いとこの死があり、悲しみの日々であったにもかかわらず、キリー・ビースレイさん（音楽教師）は、湯河原町を楽しみたいと明るい笑顔を終始たやさず、オーストラリア、日本の文化論を十分話し合うことができました。2泊3日という短いホームステイでしたが、余計な気遣いをせず、友達が来たという思いを大切に家族みんなで楽しむことができました。ワクワクする気持ちと笑顔の交流が上手くいくことであると思うし、相手も自分も喜ぶことにつながりました。
[秋山こず枝さん]

☆中学生で子どもと年齢に近いこともあり、お姉さんが来たとき大喜びでした。言葉が通じなくても、心は通じるということがよく分かりました。

[石井かよ子さん、博子さん]

☆リーン・メローとのお別れの夜、クラリネットを吹いてもらった。アラジンの曲で、大好きになり、両親にねだってCDを買ってもらい、思い出の1曲になりました。お礼にピアノを弾きました。カンガルーのバッチは文子の宝物!!

[大切な音楽交流をした

石井文子ちゃん・小5]

☆思ったより大変でなく、ジェシカは素直でおしとやかで、日本語がとても上手で、お互いの言葉で話し合う良い経験になった。交流は時間ではなく、気持ちだと思います。2日間夜遅くまで話をしました。

[作田淑恵さん]



☆初めの日^かは誰が話すのに勇気がいた。前もって英語の文を勉強し覚えました。私の第一声は、英語で「何か飲みたいものはありますか?」だった。顔を見るのが精一杯だったのに、最後の日は涙の別れとなり、また会うことを約束しました。

[湯中の吹奏楽部所属。集いで演奏してくれた作田晴香さん・中3]

☆2日目のお弁当に朝おいなりさんを作り、他のおかずと共に賞味されたグッドウィン一家。「おいしい」とお父さんは食べてくれましたが、ソフィーちゃん(9才)はハンバーガーになりました。また、「ゆとろ」へご招待しましたが「リラックスできる」と気に入られ、次の日みんなに声をかけ、温泉デーとなり、市長さん以下みんなで「湯リラックス」しました。

[浜野ゆかりさん]

☆温泉での水のかけっこが楽しかった。パーティーとってもかっこよかった。外国人だけどやっぱり友だちは一つになれる。寝る時もいっしょで、ずーっといっしょにいたことが楽しかった。

[何回もホストファミリー経験豊かな
浜野節子ちゃん・小5]

おたより 紹介

昨年12月に湯河原を訪れた、ポースチープンスの市姉妹都市委員会のアネット・ランブルさんから、ホストファミリーの岩本京子さんに届いた一通です。

1998年2月3日

こんにちは、お元気ですか。

ずっと、皆さんに手紙を書こうと思っていました。飛行機には少々参りましたが、日本での休暇は素晴らしく、主人のマイクや息子のティムに、沢山のみやげ話ができました。クリスマスが過ぎ、私たちの最も忙しい旅行シーズンが続きます。大勢のお客の世話をする以外、1月は多くの事をする時間がありません。アミーとティムは、5週間の夏休みを終え、いま学校へ戻ったところです。こちらの夏はとても暑く、平均温度は33℃です。休暇の人はともかく、働くにはあまり良いものではありませんね。

日本での休暇が楽しいものになり、皆さんのような素敵な家族と知り合えて、とても嬉しく思います。明子さん、伝統的な茶道を、特別に私のために実演してくれて、ありがとう。皆さんの心のこもったおもてなしは、湯河原での経験同様、私の心にいつまでも残ることでしょう。主人とティムに、私の経験をわかってもらえるよう、家でスシやテンプラ、それから私が皆さんの家で味わったのと同じ夕食を食べました。生のエビや肉、野菜をテーブルの真ん中のホットプレートで調理したものです。もっとも、サツマイモは私の家では栽培していないので、どこかにある日本のスーパーを探さなくてはならないでしょう。そうすれば、あのタレも見つかるでしょうね。

アミーは、今年日本語を勉強しています。学校に日本人の補助教員がいて、4月からホームステイをしています。オーストラリアのことを、皆さんがもっと楽しんでくれればと思います。正次さん、あなたは私に広野の開発について尋ねましたが、オーストラリアについて、特に未開発の地についての本が興味深いと思いました。また、寒い冬の日にはジグソーパズルをやって楽しめるのではないのでしょうか。

長野オリンピックのハイライトをテレビで見えています。ゲレンデをハイスピードで下るものや、モーグルというスキーで、難しそうです。皆さんもオリンピックを見ておいでですか。ティムがCDをいただき「ありがとう」と言っています。また、カードも有難うございました。正吏君と智寛君は、サッカーをいっぱいやっていますか。

皆さんのご親切に、もう一度お礼を申し上げます。いつか私と家族が、同じご親切にめぐり会うことを願っています。またお便りします。さようなら。

アネットより



アネットさん、アミーさん親子と
ホストファミリーの岩本さん
—観光会館にて—

国際交流協会のメンバーの高橋さんが、かつて面倒をみた7人の子供達との再会を願って、その成長ぶりを楽しみにロシアへの旅をした。渡航するのに意外に面倒な事があり、この5月、ようやく5年ぶりの再会を果たした。まだ素朴さの残る、ロシアから独立した新生国家ベラルーシの実情や、子供達との劇的な再会の話聞かせていただいた。

旧ソ連邦ウクライナ共和国の、チェルノブイリ原子力発電所第4号機が、爆発事故を起こしたのは、86年4月。ベラルーシ共和国ゴメリ州は、最も被害を受けた地域で、その後子供達の間で甲状腺ガンや白血病が多発し、世界中の話題になった。事故が発生したときに、運悪く風下にあったホイニキ村(発電所から約40キロ)は、放射能に汚染された。その村の子供達、男女11名が、短期間ながら日本に滞在することになり、少しでも慰めになればとの心遣いで、高橋さんが、内7名を自然豊かな江ノ浦の自宅で、一カ月間預かった。93年4月のことである。

子供達との5年ぶりの再会を期して

ベラルーシの首都ミンスクから400キロ、舗装されていない道路を、ただひたすら再会の期待と喜びで走り走った。ホイニキに着くと、ござっぱりした子供達が、思わず抱きついてきた。皆、立派な青年、美しい娘さんに成長していた。涙ながらの再会は、どれほど高橋さんの心を揺さぶったことだろう。家族全員の歓迎ぶりを写真(会場にて回覧)で拝見して、我がことのように嬉しく思った。思い出話は尽きることなく、同道した高橋さんの息子さんも、本当の意味での国際交流を体験し、理解できたことだろう。



5年前高橋さんがお世話した"サーシャ2号"ことアレキサンダー・ブラク君(中央)と家族



チェルノブイリ原発事故慰霊碑の前で

富める国と比較的に貧しい国との落差

高橋さんが感じた両国の実情の落差は、今の日本人として、学ぶべきものでもあった。富める国の心の貧しさ、品性、品格を問われている日本、貧しいながらも豊かな心を持つ、独立国である、かの国の人達の真剣な生きざまを紹介された。

国際交流協会の立場として、相手国の実態を書くことは控えなければと思う。独立国家として歩み始めた日本の戦後を振り返るには、時間が経ち過ぎた感はあるが、世界の一面を知る良い機会だった。

ヒューマニストの高橋さんに、心から敬意を表する。
[石井 宏樹]



ベラルーシの厳しい実情、子供達との再会...
熱心に語る高橋さん

【活動報告】

海外都市との交流

昨年9月に、湯河原小学校児童の絵画58点を、豪州ポートスティーブンスへ送付。ネルソンベイ小学校で、展示されました。

'97クリスマス会

12月22日夜、スタジオ千夢にて。会員が集い、賑やかな夜を過ごしました。

募金協力

クリスマス会チャリティーオークション売上金 ¥40,100 を下記へ募金いたしました。

ダルニー基金(タイ国児童への奨学金3名分)..... ¥30,000

シャプラニール=市民による海外協力の会..... ¥5,100

ネパール教育支援の会..... ¥5,000

記念誌の発刊

協会の10年のあゆみを綴った「Dear地球民 設立10周年記念誌」が、式典に合わせ刊行され、会員、ホストファミリーほかに配布されました。

【お知らせ】

任期満了に伴う役員改選により、下記のとおり新役員が決まりました。

会 長... 高橋賢次(新任)

副会長... 杉山茂久、早藤義則、高橋一子、金井文江(以上再任)、竹林徹雄(新任)

会 計... 山中恵理(再任)

【第13回やっさ国際交流】

おなじみのホームステイ交流が、7月30日(木)から8月6日(木)の8日間行われます。東京の日本語学校の留学生、ブラジル人研修生など20名ほどが参加予定です。留学生はホストファミリーと共に”やっさパレード”にも参加します。一緒に踊ってみたい方、大歓迎です。詳しくは、事務局までお問い合わせください。(☎63-0111)